こんぜ新聞

'93.2 No.188
発行 南田明夫
責任
0883-68-5292

きのうきょうあした

～失われた集落～

この冬は、雪の量は少なかったが、温度は低めで、インドアの生活が中心となってしまう状況。白い物を見れば気力が萎えてしまい炬燵の中にもぐりこんでしまう。読書、昼寝のくり返し。時々雪かき、そして愛犬ジョンキーとの散歩というスタイルが中心となった一日。

それでも季節は着に近づいているようで、もうすぐ福寿草が咲きはじめてくるし、エキワリイチゲに出合うと嬉しくなる。

季節は必ずめぐってくる様です。生のうから、そのように繰り返し様に、様々な事が、くり返されているようでもあり、そうでもなく、いつの日か忘れさられてしまってる事もある。という様な事を感じる日々がありました。

栗和谷小学校で「昔の遊び」を教えてくれとの依頼があり、おじさん四人で、年生二年生の皆さんと遊ぶチャンスがありました。皆さんというよりも七人位の子供たちです。

おじさん達は、想い出のかげで子供達の前で晩酌をしようと入りきれが、身体が反応してしまって、あの時の様にはいかなかったが、酒席になると一緒にやってると、なんとか、迷人にはなれるようです。

べっこ(メンコ)ビー玉、つまデッポウ、ゴマ回し、羽根つき、ゴム飛びと、次々と子供達に遊び方を教えてもらう。(当然ですが)

今の時代、ゲーム主(日中がもやっとうる子供どうしが、外で遊んでいるすがたが仲間がいないのだ、知るチャンスがなくなってるのでいないのだと感じました。

そういえば、様々な事が、様々なことが少なくありません。集落の行事、祭り、暮らしの技術などなど、きのうの時代から伝わっていること、失われていくことが。時代が変わってしまった、生活スタイルが変化したとはいえ、残念なことではあります。

集落さえなくなってる訴もあります。

私の住む今井地区でさえ、十三軒あった家が、今では、たった四軒、四年住んでいるのは、和泉一軒という状況、お祭りさえ出来ません。

中心人物の三名が首を切られ、京柱峠に晒し首にされたが、祖谷民衆の人望があつく、型をかえてのお墓をかが存在するという文章が残り、大枝、小川、西山へ行き見てきました。確かに存在してます。

びも対談の(祖東祖谷山村)の中には見えません。

過去のことばかり語る年令になったのでしょうか。どうも気になる年令ありません。

にぎ、そうなっても生きていけます。だってが今があるのに次の時代につなげていけないのでは。今の時代を生きている人の責任ではないでしょうな。

次の時代を担う人々に、ちゃんと伝えればそれば祖谷そのものが消えてしまうかも知れません。

男子新聞記事に「祭りのある村には未来がある」と書かれてましたが、今井地区には未来がないのかも知れません。

六九年にはじめて祖谷という土地に人が住みはじめ、ピーク時には八千人の人口もあった東祖谷。田や畑があった所の多くは杉林の中。

そして、人口は、今や三千を割ってしまってます。

これが、経済発展と、進歩している人類の一面でもある現実です。

また、一九七年代半ばにあった祖谷山一揆について、調べる機会があり、祖谷の歴史の大きな出来事なのに余りにも無知なことを知りました。